第１回「立山黒部」世界ブランド化推進会議　議事録

日　時：平成29年６月１日（木）
16:00～18:00
場　所：都道府県会館 101大会議室

１　開会

２　挨拶（石井知事）

３　新委員及びオブザーバーの紹介

【司会】
議事に先立ちまして、お手元にお配りしてございます名簿と配席図をご覧ください。
この会議の委員には、昨年度の「立山黒部」の保全と利用を考える検討会の皆様に加えまして、新たに８名の委員、オブザーバーの方々に加わっていただいております。本来、皆様をお一人ずつご紹介すべきところでございますが、時間の関係もございますので、失礼ではございますが、この会議から新たに委員、オブザーバーにご就任いただいた方々のみご紹介申し上げます。
まず、委員の皆様をご紹介いたします。関西電力株式会社代表取締役社長の岩根茂樹様です。本日は代理で、取締役常務執行役員の勝田達規様にご出席いただいております。森トラスト株式会社代表取締役社長の伊達美和子様です。株式会社ラティナ・インターナショナル代表取締役のダニエル・モンテベルデ様です。
次に、オブザーバーの皆様をご紹介いたします。国土交通省鉄道事業課長の大野達様です。環境省国立公園課長の岡本光之様です。観光庁観光資源課長の蔵持京治様です。
なお、本日は所用のため欠席されていますが、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻・世界文化遺産学専攻教授の吉田正人様、桜美林大学教授の渡辺康洋様にも新たに委員として加わっていただいております。また、皆さまの委嘱状につきましては、席に置かせていただいてございます。
それでは、早速ですが、議事に入りたいと存じます。今回の座長は東京大学の西村教授にお願いしてございますので、ここからの進行は西村座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

４　議事

（１）各プロジェクトの推進に向けた枠組み

【西村座長】
よろしくお願いします。座長を務めます西村です。
今回は新しい装いになりました会議として１回目ですので、まずは本会議の趣旨と今後の進め方につきまして、事務局から説明をお願いしたいと思います。

（事務局より資料３、４に基づき説明）

【西村座長】

ありがとうございました。

それでは、議事に入りたいと思います。まず、「（１）各プロジェクトの推進に向けた枠組み」ということですけれども、今、説明がありましたように、各プロジェクトの責任者、関係者とスケジュールイメージについて議論することとしております。ただ、それに限らず、各委員の皆さま方にはプロジェクトの内容や方向性も含め、広くご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

ここからの進め方ですけれども、昨年度議論した28のプロジェクトもありますので、これをテーマ別に三つほどに分けて事務局から説明いただいた後、委員の皆さまからご意見をいただくという形にしたいと思います。各論から入ってしまうわけですけれども、新たにメンバーとして加わっていただきました伊達委員、モンテベルデ委員に関しましても、それぞれの議論に加わっていただきたいほか、全体の説明が終わった後でご専門の立場から、検討全体の方向性など、総論的なコメントをいただきたい。他のメンバーからは、昨年度、総論的なコメントをいただいておりますので、よろしくお願いしたいと思います。そういう形で、三つに分けて進めるということでよろしいでしょうか。

それでは、資料５に基づきまして、まずプロジェクトの「01混雑スポットにおける食事・休憩スペースの拡充」から12番までの説明を事務局からお願いします。

（事務局より資料５に基づき説明）

【西村座長】

ありがとうございます。随分かけ足だったので、フォローが大変だったかもしれませんけれども、この12項目についてコメントをいただきたいと思います。最初の口火を国の観光振興の旗振り役でもいらっしゃいます観光庁長官の田村委員からよろしいでしょうか。

【田村委員】

昨年から、この会議の前身の検討会にも参加させていただいて、議論に加わらせていただいておりますけれども、今、個別のプロジェクトのご説明から入ってしまったので、初めての方は分かりにくかったのではないかと思います。中間報告書で、最初にどういう観光地を目指すのかということについてある程度書いていただいたので、やはり体験型そして宿泊型の旅行者というものを増やしていくという問題意識を持って、そのために必要な磨き上げをしていくということでいろいろなプロジェクトができあがっておりますから、そういうものを全体として見たときには、体験型、そして先ほどは宿泊型と言いましたけれども滞在型の観光地にしていくために、一つ一つは大きいものもすごく細かいものもありますが、方向性としてはいいものがそろっていると私は思っております。

その中で大きいもの、例えば、良質な宿泊施設をどうやって誘致し作っていくのかというような話、それから、いわゆる国立公園エリアの開発行為を伴うようないろいろなプロジェクト

といった部分については、きちんといろいろなワーキンググループでの検討を踏まえて、いろいろと進めていかれるのだろうと思いますけれども、方向性として、私はこういうものをそれぞれ詰めていろいろとやっていくことで、立山黒部の観光地としてのレベルアップに必要な材料はそろってきているという感じをいたしております。

【西村座長】

ありがとうございます。確かに全体として何の取り組みをやるのかというところはすごく時間が短かったので共有できにくかったかもしれませんけれども、個別のビジターにもう少し豊かな滞在型のいろいろなプログラムを提供しようということですね。

他のご意見はございますか。

【佐伯（千）委員】

立山山荘協同組合の佐伯といいます。現在、立山一帯にある山小屋、宿泊施設の22軒がうちの組合に参加しています。そのうち、室堂地区には大体５軒あります。その５軒がどういう状態かといいますと、先ほどキャパシティが不足しているのではないかという話がありましたけれども、現在、キャパシティは十分にあります。その５軒分で相当ありまして、その中にあるうちのいわゆる宿泊客の客室の稼働率を紹介しますと、５月から６月は40％を切っております。７月、９月、10月で50から60％くらい、８月で八十数パーセントになっております。11月にいたっては10％くらいしかありません。

こういう状況の中で新たな施設というのは、われわれ組合としてはなかなか受け入れられないものだと考えております。皆さん考えていただければ分かると思いますけれども、どうしてもわれわれの組合は、新たなものが入ってきますと、宿泊施設ですから割を食います。その場合に、「これはまずい」という状況になる施設も出てくるのではないかと非常に心配しております。うちの組合で「今このような話が出ています」と言うと、「これ大丈夫なの？」という声を私に対してかけてきます。そういう状況を皆さまに理解していただきたいというのが一つあります。

それから営業時間の延長うんぬんですけれども、これも、例えば夜に星空が見られたらとか、夕焼けを部屋で見られたらというのは、今まではわれわれ山小屋の専売特許だったことなのです。実はこれが売りなのです。その売りを取ってしまわれたら、われわれは何を売るのでしょうという疑問をちょっと呈したいです。

こういう話を進めていかれるに当たってぜひともお願いしたいのは、われわれ地元の宿泊施設に事前に声をかけていろいろと相談していただければ、100％否定するものではございません。ですが、今言ったような事情がございますので、その辺をご配慮いただければと思っております。

もう一つ、アルペンルートの早期営業は随分昔からやっておられますので、われわれも長く付き合って見ております。どういうことかと言いますと、強いて私どもの立場からは、先ほどの２件から言えばそんなにございません。ただ、眺めてみますに、雪崩の事故がいろいろと起きていますけれども、山の中で起きる分には登山者の自己責任で済んでいるわけです。それへの対処というものは宣伝、ビーコンの持参や入山届を出しましょうということで、冬山の指導をいろいろなタイミングで結構行っています。だいぶ効果が上がっているのではなかろうかと

思って私は眺めておりますけれども、いわゆるアルペンルートの交通機関内も山なのです。そういう面に配慮しないと、はっきりは言えませんけれども、危険なときが出てくるのではなかろうかと心配しております。以上です。

【西村座長】
ありがとうございます。ここに書いてあることは、山小屋と少し競合する部分があるのではないかという懸念と安全性の問題ですけれども、その点について事務局から何かありますか。

【事務局】
こちらにつきましては、推進体制とスケジュールについてご説明させていただいたわけですけれども、今後、皆さまのご意見を踏まえてしっかりと検討して、このスケジュールをイメージしつつ進めるということでございますので、その中で、今いただきましたご意見、その他の皆さまのご意見も踏まえて、検討を進めさせていただきたいと考えております。

【西村座長】
無理やりやるというものではないということですね。

【事務局】
補足させていただきますと、もともと他の山岳地域と比べると宿泊施設のバラエティが、立山黒部は一つのところに偏っているのではないかという問題提起が前の検討会でありました。比較的高額な価格帯の宿泊施設が少ないのではないかということが現状の課題として書いてあった上で、今のプロジェクトになっているのです。そういう意味では、割と高い単価で観光客が泊まるホテルの施設が足りないのではないかという問題意識で「宿泊施設の整備」というのがあります。今ご指摘いただいた山小屋のお客さまとここで考えているお客さまとは違うのではないかという認識が、われわれにはあります。それが１点目です。
そういう前提に立ってみると、立山黒部エリアにそうした観光客が泊まるような宿泊施設が他のところと比べれば少なく、ホテルについてはキャパが結構小さいという中で、泊まらないと見られないものがいくつかあります。星空やご来光というものを、キャパが小さいならキャパをつくっていくということもやるけれども、泊まらなくてもそういうものを見るすべはないものだろうかということで、営業時間の問題がここに出てきています。
いずれにしても、環境の問題、既存の事業者さんとのすみ分けの問題、安全性の問題など、幾つかテーマがありますので、丁寧に一つ一つ課題をクリアしていきたいと思っていまして、そういう意味でワイドに議論するということにさせていただいております。いずれにしても、進捗も含めて、この会議でもしっかり報告させていただきたいと思っておりますし、みんながウィン・ウィンになる仕上がりになるようにやっていこうと思っております。

【西村座長】
ご懸念の点はワーキングできちんと議論するということですね。

【髙木委員】

今の話を聞いて少しびっくりしたのですが、当然だと思いました。というのは、富山大学では、国際学会を開くのに女子トイレを全面改装したのです。女性の副学長さんが、和式トイレだけでは恥ずかしくて世界の大会を開けないと。全く一緒で、昔の山小屋風のトイレは、海外の人はみんな素通りです。それは、外国人から見て、素晴らしいドレッサールームがあるなど、今の話と続くのですが、もう少し、ここにも出て、ワーキングでも話し合ってもらえばいいのですが、いわゆるレベルアップ、欧米並みの宿。今は、雑魚寝や和式トイレでは女性客が嫌がるのです。

ですから、そういうことも含めて、新たにつくるうんぬんもありますけれども、まずはここに投資をしていただいて、それに対する経済界や県のサポートも含めて、それを旅行商品に組み入れていくことが稼働率のアップにつながるのだろうと思います。新しくつくるということだけではなくて、今までのホテルの環境で本当に人を呼べるのかということについても議論していただきたいと思います。以上です。

【西村座長】

ありがとうございます。佐伯千尋委員。

【佐伯（千）委員】

なかなか随分と重い課題がたくさんありまして、言い出すときりがありません。トイレも随分立派になりましたが、これは環境省さんの補助をいただいて、ほとんどにウォシュレットが入っております。そういう山小屋が多いです。劔でもそうらしいです。いろいろとこの中やワーキンググループ等でたくさん話をしたいのですが、この「宿泊施設の整備」に関しては、ワーキンググループが開かれないと解釈しております。確かそうですよね。

【事務局】

今の資料では、それぞれ県がやるということになっていますけれども、ワーキンググループで取り扱えると思います。今の資料にはワーキンググループとは書いてありませんけれども、今のご懸念は理解しましたので、ワーキンググループできちんと議論していきたいと思います。

【佐伯（千）委員】

了解しました。それでは全てワーキンググループの方でお願いします。その場でいろいろとまた発言していきたいと思います。ありがとうございます。

【西村座長】

ありがとうございます。他はいかがでしょうか。岩根委員の代理で勝田さん。

【勝田委員代理】

関西電力社長の岩根の代理の勝田でございます。ただいまご説明いただきました話の中には、かなり関西電力がいろいろなところで絡んでおりますので、県が観光に力を入れているということについて理解いたしますし、できるだけ協力してまいりたいと思います。今回は、特に黒部ルートの旅行商品化につきましてご説明したいと思います。

私どもとしては、県が旅行商品化を進められるということについての義務と期待は大変理解いたします。関西電力としても、地元企業として協力してまいるという立場をとりたいと思いますので、前向きに検討したいと考えております。しかしながら、旅行商品化する中で、当社としては課題、疑問点がございます。

特に課題を申し上げますと、やはり安全性の問題をどうしても考えざるを得ません。この28ページには、安全かつ発電事業に支障なくこれまでやれていて十分可能と書いてございます。安全性につきましては、おかげさまで公募を始めてから約20年たちますが、幸い無事故でやってこられたということで、私どもとしては大変よかったと思っております。しかし、もともと黒部ダム、あるいは発電所の保守運用のために使っておりますいわゆる作業ルートでございます。したがいまして、リスクはあるとわれわれは思っております。これまでの見学という目的ではなくて、お金を取って観光客に来ていただくということになりますと、私どもに求められる安全対策のレベルは、今のままでは不十分であるというのが私どもの考えでございます。

したがいまして、どういう点が安全対策で問題になるか。安全対策についてはできるだけ必要最低限でいくべきだと私どもは思っておりますけれども、例えば、上部軌道のところは約７kmほどのトンネルでございます。ここは昭和14年、80年前に掘り下げたトンネルでございまして、現在でも３分の２が素掘りの状態でございまして、落盤がほぼ毎年起こっております。昨年は５月と９月に２回の落盤がございまして、５月のときは1.3ｔの岩が線路に落ちております。そういう状況の中で、われわれとしては安全が非常に心配ですので、年２回、打音検査を実施しております。しかしながら、なかなかこれは防ぎきれません。理由を現場に聞きますと、打音検査をしてもたたく場所によって分かるときと分からないときがあるというのが一つと、どうしても日々、劣化してまいりますので、なかなか全部を防ぐことは難しいということです。

もう一つは、客車を３台ぐらい引くバッテリーカーを走らせております。バッテリーカーは、電池火災などを考えますと、火災対策をやりましてもトンネルの７kmに排煙設備がございませんので、こういうところは最低限の排煙設備が要るのではないかと私どもは思っております。それから、途中にインクラインというものがございまして、傾斜が約34度、450mほどのケーブルカーでございますけれども、ここについても、今は途中で止まりますと、幅50cmほどの避難階段を2,000段ほど行かなくてはいけない状況です。また、現在、予備電源がございませんので、これらもきちんと入れた方がいいのではないかと考えております。

それから、安全性以外に、ここは当社の発電設備を維持するための中枢ルートでございますので、たまに緊急工事もございます。そういう場合に、今ですと無料の見学でございますので、「申し訳ございませんが」ということで中止したりお断りして帰っていただくということにしておりますけれども、有料の観光になった場合にそれがどうなるのか。私どもとしては工事を最優先したいと思っておりますので、そういう点などがどうなるのか教えていただきたいところでございます。

そういう意味で、これらの諸課題について、私どもとしても、国や専門家のご意見を聞きながら、できるだけ必要最低限の形で対策をとっていきたいと思っておりますけれども、この対案を作りまして、ワーキンググループでよくもんでいただきたいと思っているところでございますので、どうかよろしくお願いしたいと思います。

あと、県のご要望では、公募見学会と社客見学会で合わせて4,000名と記載しておられます。私どもの社客と申しますのは、当社の事業に深い関係のある方、あるいはオピニオンリーダー、

マスコミの方を今まではご案内しておりましたけれども、昨年から電力の自由化も始まりまして、お客さんや営業関係の方もお連れして、それが当社の戦略の一つになっております。そういう意味では非常に重要な要でございますので、社客の部分をこれに加えられるというのは、私どもとしては堪え難いと思っております。したがいまして、今回の商品化の話につきましては、公募見学会の2,000名について考えていきたいと思っております。これは関西電力のスタンスということでご説明申し上げました。

【西村座長】

ありがとうございます。課題があるというお話です。この件に関して事務局どうでしょうか。

【事務局】

また、委員の方々のご意見を繰り返してお聞きしたいと思いますけれども、もともとこのプロジェクトは、前回の資料にもありましたけれども、立山黒部アルペンルートと黒部峡谷鉄道がつながっていない。これをつなげると、周遊性が確保できて観光資源としての魅力が非常に高まるところだけれども、周遊性が確保できていないという論点から始まったものであります。ただ、そこには関電さんのルートが実はあって、そこを通れば産業観光をしながら、貴重な産業の歴史を見ながら両地域がつながるということで、旅行商品化していただけませんかという経緯で提案されております。

実際、今ご説明がありましたとおり、一般の方々も社客と公募見学会という形で、関西電力の社員さん以外の方々が入っておられる。ただ、もともと工事用につくられたところなので、たくさんの方は入れない、キャパの問題があります。たくさんの方を通そうとするとハードの工事が要るのでなかなか難しいということで、今まではいわゆる一般のお客さま、観光客が来ることができないものでありました。それを旅行商品として販売するという形で、数は限られているけれども、2,000名ないし今は関西電力さんの一般のお客さまが何人か、私たちは2,000名と聞いておりますけれども、計4,000名程度あれば観光客が来られるようになるのではないかということで、この提案がなされてきたわけです。

今回の資料で関西電力さんにご説明いただきたかったのは、結局、今はキャパシティが限られていて、非常に多くのお客さまを通そうとするとそれなりの設備が必要になってくるということなので、では今は実際に一般の人が何人通っているのかということです。安全性について議論するために、一番そこが大きなポイントになってきます。われわれは、2,040名の一般のお客さまが通っていることは知っていますけれども、それ以外に何人通っているのか。大体2,000名以上というのはお聞きしておりますけれども、具体的に何曜日に何人が通っているのかというのはわれわれは承知していないということで、安全性を議論するときにそのデータをまずいただけないかというのがこの今日のものであります。

②の方ですけれども、関西電力さんも安全性、安全性とおっしゃるのですが、少なくとも公募見学会については年間2,000名を安全に通している。その安全な通し方というのは、資料の31ページに書かせていただいたとおりで、例えば、少人数で管理された形で、必ず案内人の方が随行する形でお運びするということや、対象年齢も小学５年生以上で小学５、６年生の場合は保護者が同伴しないと駄目、乗り物の乗り降りや階段の歩行に支障がない方など、いろいろな前提を付けながら、どちらかというとソフト面で安全性を補いながら一般の方をお通しされて

いるということで、これを旅行商品の一部として組み込む。

今の募集の仕方は、はがきで応募して抽選で当たれば通れますという形ですが、これだとまず旅行商品になりません。観光商品としてキラーコンテンツでありながら、いわゆる観光客に対して訴求できていない。訴求する材料にさせてくださいという提案で、旅行商品の一部という形で組み込んで、旅行商品として販売することができないかというのがこの提案です。

それに対して、今の関西電力さんのご説明は、旅行商品としてお金をとった瞬間に安全性のレベルが変わるということだったと思うのですが、事務局として理解できていないのが、今の一般公募の見学会や社客の皆さん、営業関係の重要な戦略になっているとおっしゃっていましたけれども、その方々に何か事故があったときに、あなたたちからはお金をとっていないから安全性のレベルが低いということにはならないと思うのです。社客の方は私たちは関知していませんけれども、少なくとも今の公募見学会について言うと、安全性の問題はクリアされているということで通っていると理解しています。そのクリアの仕方は表で整理させていただいたもので、この選び方を旅行商品に組み替えるという形で追加的に何か安全性の新しい論点が出てくるのかというところをぜひ教えていただきたいということであります。

確かに、いろいろなことをやっていただいたら安全性は高まるに決まっているのですが、それをやらないと旅行商品化できないということにはならないのではないかという問題提起であります。

【西村座長】

今は公募の部分もそれなりの安全性を確保して、慎重にやられているではないかということですね。いかがでしょうか。

【勝田委員代理】

社客のデータの提示の話でございますけれども、年々、変わっているのですが、大体、今の輸送量のトータルとして人数に換算しますと、年間の輸送量は今現在２万人程度です。そのうち、私どもの工事の関係、あるいは作業員、資材、その他の搬入が、年によって工事量でだいぶ動きますけれども、アバウト１万5,000が発電所の維持、運用のために使われております。残りの5,000のうち、公募が2,000、残りの3,000には工事量のバッファーが入ってくるわけですけれども、その隙間で社客を運用させていただいているということでございます。

それから、公募でも十分に安全を保てているではないかというお話はよく分かるのですけれども、私どもとしては、やはり万が一の際の社会からのいわゆる非難はものすごく心配するところでございます。それは今の公募の中でも、事故があれば当然ながら私どもがいろいろな形での安全対策を含めて非難を受けるわけですけれども、有料で入ってこられた観光客に対しての不十分な安全性ということで一層の社会的非難を受けるのではないかと当社としては考えておりまして、最低限の安全対策は不可欠ではないかと私どもは思っているところでございます。

【西村座長】

ありがとうございます。山田桂一郎委員。

【山田（桂）委員】

まず、会議に遅刻し申し訳ございません。飛行機が遅れまして、今さっき、日本に着いたところです。

出てくる前に、地元のツェルマットで、ちょうど索道会社などとの話し合いの会議もあったものですから、安全のことに関して、以前から私が疑問に思うところなのですけれども、環境を守る、命を守るとも一緒なのですが、安全性に関してはイエスかノーかだと思います。入れないなら全く入れない、入れるなら入れるのどちらかですよね。今のお話ですと、第三者からしますと、お金をとる、とらないで命の重さが違うと聞こえるのです。とると責任が重くなるという説明は、ちょっと私には理解ができないです。

スイスでもまだ６割近くが水力発電で、いろいろなところで見学会をやっています。先ほどお話があったように、工事優先ですし、命が優先ですから、そのときには入れないし、年や時期によって見学できる対応が全く違うのは当たり前だと思います。ただ、命に関しては、私はイエスかノーかだと思います。入れるのならば、安全をきちんと担保した上で入れていらっしゃるというお話でしたので、別にそこにこれからたくさん増やせという話ではなくて、一部だけでも一般の方がもっと入れるようになって、より水力発電もしくは関西電力の皆さんのやった仕事の理解を深めていただくという意味では、オープンにしていただくという部分で前向きに考えていただいた方が私はよろしいのではないかと思います。これは、例えば、命を守るからこそより知っていただく、環境を守るからこそ利活用も含めてもっと知っていただくということと私は同じように考えています。

【勝田委員代理】

おっしゃることはよく分かります。法的責任についてはおっしゃるとおりだと思います。ただ、私どもとしては、やはり有料で観光される方とわれわれの作業ルートを見学に来られる方とでは、事故の際、私どもが社会的非難を受けるわけで、それは違うと認識しております。したがいまして、現在やっているではないかという話につきましては、それは私どもの責任でやっておりますし、公募につきましては県様とのお約束で2,000人の公募をとっていただいておりまして、それに対しては私どもは精いっぱい安全を確保するべく努力をしているところでございます。以上です。

【山田（桂）委員】

ありがとうございました。公募の部分のうち、例えば一部を一般客向けに開放するということも含めて、今後ワーキンググループ等々でまたお話しさせていただければということでよろしいでしょうか。

【勝田委員代理】

公募の中の一部を旅行商品化するというお話であれば、先ほども申しましたように、１泊旅行の一部、あるいはそのような形で有料で観光に来られる方については、インバウンド等も考えられますし、私どもとしてはそういう方に対する安全については今のままでは不十分かと。もう少し手を入れて、落盤や排煙といったところは最低でもやりたいと思っております。

【山田（桂）委員】

おっしゃることは当然だと思います。どこに手を入れればいいのかも含めて、今後、議論が必要だと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

【佐伯（千）委員】

今、安全はイエスかノーかと言われましたが、アルペンルートの雪の大谷の上は安全ですか。アウトドアの場合はどう考えられるのですか。

【山田（桂）委員】

どこまで位置付けるかということで、ヘリスキーでも登山でもそうですが、最低限、安全を確保する努力はします。

【佐伯（千）委員】

どんな安全確保をされるのでしょうか。前回、一番最初だったと思うのですが、雪崩の危険があればダイナマイトで落とせばいいと。国立公園の中でしかもライチョウもたくさん棲んでいるところでダイナマイトを仕掛けられるのでしょうか。われわれにとってはすごく非常識な発言だった気がするのですが、それはスイスでは常識なのですか。

【山田（桂）委員】

自然環境が違いますし、氷河上や森林限界の在り方が違いますので、一概には。ただ、ダイナマイトを仕掛ける、仕掛けないも含めて、今後の議論にしていただきたいと思います。なぜかといいますと、その辺の差があるのと、先ほど命を守るのも環境を守るのも一緒だからイエスかノーかという言い方をしましたけれども、守るのが基本で、保全と利活用ですから何をもって守るのかといえば、命を守る、環境を守るのが第一優先でございます。そういう視点を持ってお話ししているということでよろしいですか。

【事務局】

あそこでダイナマイトができるかできないかは、ここでは議論になっていないと思います。安全性の確保の手段として各国でいろいろな方法があり、雪崩を題材にするとダイナマイトを使うという方法があるのではないかという紹介が議論の中であったのは事実です。ただ、それを立山でやるかどうかという議論はしていません。

【佐伯（千）委員】

立山でダイナマイトを仕掛けるということは非常識極まりないですよ。これをご存じないということはどういうことなのかということです。私が常々思っているのは何かといいますと、もっと地元に住んでいて地元を理解している人、長く現場にいる人の意見を聞いてほしいということです。以上です。

【事務局】

分かりました。

【石井知事】

今、佐伯さんがおっしゃったことは、それはそれで大事なことだと思います。ただ、私は岩根社長の代理でいらっしゃる勝田さんのお話を聞いて、ちょっと腑に落ちないのは、社客の枠を2,000名、あるいは2,000名以上としていらっしゃるのでしょうけれども、営業政策のこともあるからあまり減らしたくないというお話がありました。これはご存じの上でおっしゃっているのでしょうけれども、これまで関電ルートを今の形でするのを、あそこにトンネルを掘ってその後にどうするかという議論が散々あったときに、当時の厚生省、今だと環境省になると思いますが、「工事用として建設される道路は、工事竣工後はこれを公衆の利用に供すること」という条件が付いているのです。ですから、今おっしゃったことは、会社の都合で大事なお客さんがいるからなかなか一般の人に振り向けにくいというように聞こえましたが、それはちょっと考え直してもらった方がいいのではないですかね。

それから、会社として大事な人は今までも通していらっしゃるのですね。それなのに、急に観光商品化というと、いかにももうけるという感じがするからそうおっしゃるのかもしれませんが、それはやり方の問題なので、いずれにしても、多くの方が関電ルートを、今のあの黒部ルートを通りたいというニーズがあることは間違いないので、そういった幅広い観光客、国民、あるいは外国からの方も含めて受け入れるように、なるべくこの枠を広げていこうと。せっかく協力するとおっしゃるのですから、そこはよく関西電力として、社会的に責任を持っていらっしゃる立派な会社ですから、会社の都合で「一般の人は少し遠慮してよ」というふうに聞こえましたが、ちょっといかがなものかと。

それから、もう一つは、先ほど言ったように、これは工事用の道路として認めるけれども、竣工後は公衆の利用に供してくださいということがはっきりと条件で付いているわけですから、そこは、ぜひ原点として念頭に置いて、これからワーキンググループで大いに議論していただくのはいいと思いますが、よろしくお願いします。

それから安全の問題は、もちろん安全が高まれば高まるほどいいのですが、20年間、一般公募の枠、社客もみんな無事故で通しておいて、特に今のお話でも社客は一般の公衆よりもっと大事だと思っていらっしゃるようなニュアンスがありましたが、そうでありながら、これをわれわれが言っている意味の観光資源化をすると、いろいろな安全対策を取らなければいけないとおっしゃるのは、何か私から見ると、協力するとおっしゃりながら、えらくハードルを高くされているように思います。

関電さんは大変立派な会社でいらっしゃる一方で、国は今、観光立国ということで2,000万人をいずれ4,000万人、6,000万人という高い目標を掲げて、これは別に時の政権の都合ではなくて、日本という国が人口減少時代を迎えて、いろいろな困難な課題があるのを乗り越えていくために国を挙げていろいろ政策を打っていらっしゃって、その一つとして観光立国ということを言っておられるのですから、ぜひ、関西電力さんのような立派な会社におかれましては、そうした大きな、今の日本という国が置かれた状況でしっかりご協力いただきたい。

また、いろいろ、もちろん地元の人の声を大事にすることも大事ですけれども、これからの日本の観光、これは富山県もそうですが、どうやったらさまざまな観光ニーズを決しておろそかにせずに、立山黒部はみんなの財産なのですから、特定の方の所有物ではないので、どうしたら多くのニーズにきちんと応えられるか、これを真摯に議論する場がこの場だと思うので、ぜひ、よろしくお願いしたいと思います。

【西村座長】

この続きの議論はおそらく今日は時間がないと思いますので、ワーキンググループの中でいろいろ議論をしたいと思います。

もう一つ、宿泊施設の話があって、もう少しレベルが高いものということでしたけれども、伊達委員、宿泊施設に関して何かコメントがあれば。

【伊達委員】

まず、今日初めて会議に参加させていただきまして、非常に立山黒部には魅力があると思いました。これから旅行で世界中のお客さんを日本に連れてきて、シェアを広げるためには、どのくらい魅力があるのか、かつ、感動するような体験をさせてあげるというのが一番重要なコンテンツになりますので、そういう意味で、自然豊かなこの場所は非常にポテンシャルが高いと思うのです。かつ、今回の会議のタイトルが「世界ブランド化を目指して」と非常に大きい目標を持たれていて、そういったところもすごくいいと思いました。

一方で、これまでのということで２枚の書類を見せていただくと、ちょっと世界ブランド化という話と私の中ではあまり一致しないというのが正直な感想です。このタイトルでは今年度からやられているのでこれからだとは思うのですが、今までの議論も、途中までではあるのですけれども、何となくパーツパーツのお話が多い中で、おそらく最初の１から６はほぼほぼネガティブチェックというか改善しようという段階のもので、７から12は非常に魅力的なコンテンツそのもので、いろいろな問題がある中で何か使えたらいいという話をしていると思うのですが、結局、ブランディングの立場から言うと、大自然全体がどういうことだというメッセージを伝えたいのかが、私にはこの書類からは読み取ることができなかったのです。

何がある、何がある、何がある、何があるという名詞と、それから写真、写真、写真。写真を見れば当然いいのは分かるのですけれども、トータルでブランド化とは何だというキーワードのようなものをきちんと探しながら、自分たちの資源に誇りを持つような作業も必要ではないかと思いました。

また、自然そのものは、世界の中で戦うわけですから、世界の中でどのくらいすごいのかというのを理解する意味でも、自分たちがターゲットとするのはどこなのか。日本ではないのですよね。世界の、スイスも含めてでしょうけれども、ターゲットと比較してどんなに素晴らしいかというのがもっと明確にならないかと思いました。

一方で、ホテル論に関しては、地域の方がぜひあってほしいと思う宿泊施設が、地域で運営するにしても外部が運営するにしてもいろいろとあると思いますけれども、ホテルというのは地域コミュニティでもあり、その場所に根ざすものなので、それは受け入れ体制があるところでないと、外からというのは基本難しいと思いますので、本当に共有の意識を持たれた方がいいと思います。

また、何となく今日の話を聞きながら思ったのが、私が世界の中でまた行きたいところはどこですかと聞かれたときにふっと思い出すのが、ヨセミテの国立公園なのです。国立公園の中に、一番トップというか、普通に車で行けるようなところの一番上だと思うのですけれども、そこにアワニーホテルというホテルがあって、予約をとるのがすごく大変だと。サンフランシスコに滞在していたときにとれたので行こうということで車に乗って、６月だったのですが途

中で雪が降って、大自然は大変だと思いながらたどり着いたのですが、そこに雰囲気のいい、木造のすてきなホテルが建っていて、朝早く起きれば、いろいろ散策するような本当にカジュアルな格好で皆さんが出ていくようなホテルなのですが、レストランはドレスコードがあって、ブレザーを着て、本格的なフレンチが出てくるというホテルで、とても感動したのです。あれも、自然体験をしつつ、自然と共生しつつも、現代人としてのラグジュアリー層が求めるものもきちんと用意するというところで、世界の富裕層がそこに向かってくる。一方で、キャンプもできたと思いますし、ロッジのようなものもあったし、いろいろな層の方がやって来るということで多様性が維持できている。だから世界の中でのブランディングができているのではないかと。

そういう意味では、多様性が一つのキーワードになると思いますし、基本的にはマーケティング的な行動なので、上を取れば取るほど下の裾野が広がるということも共通の理解として持たれると、ホテルというのはどうするべきかという話が分かりやすい方向に行くのではないかと思いました。

【西村座長】

ありがとうございます。核は多様性だということですね。

それでは、次の13から20まで事務局から説明をお願いします。

（事務局より資料５に基づき説明）

【西村座長】

ありがとうございます。先ほどご指摘があったように、いろいろなレベルの課題があって、フィロソフィーは書いていないですけれども、あるということを前提に、やる気がここに書かれている。タイムスケジュールはそういうことになっています。

特に欧米での認知度向上が課題になっているということが書かれていますけれども、モンテベルデ委員、何かその点に関していかがでしょうか。

【モンテベルデ委員】

今日初めて参加させていただきます。ありがとうございます。

僕は日本に長く住んでいますが、まだ富山に行っていなかったので、この会議に参加するにあたり、この日曜日と月曜日に行ってきました。行ってきてよかったです。そうでないと今日話す内容が薄かったと思います。

12から20までのプロジェクトの感想ですが、西洋人や欧米人を呼ぶために、多分、高いクオリティを求める外国人を呼ぶのはハードルが高過ぎるので、初めてバックパッカーで訪れる外国人カップルや、日本に来て１、２カ月過ごす時間がある人たちを富山まで呼んできて、その人たちがいい体験をすれば広がります。タイのプーケットやフィリピンのボラカイなどを見ていてそう思うのです。そういうところは昔は知られていなくて、30年前には観光客は１人もいなかったのです。プーケットの場合は飛行場もなかった。それをバックパッカーの人たちが初めて発見して、そこが素晴らしいと分かってそれを伝えるので、だんだん人が増えてくる。それを富山もやればいいと思います。自然がいいから。

そして、まだ不便ですが、それはとても大切なところです。例えば、どこから富山に行くのか。東京から行くのか、大阪からはまだ新幹線ができていないですから、時間がないととても富山まで足を運ぶのは大変だと思います。僕が行ったときもほとんど中国人でした。聞けば台湾から来ている人が多くて、本当に日本語より中国語が聞こえたのです。多分、中国人が70%、日本人は15%だと思います。そんな感じで、聞いたら富山へは直行便があるので、それで来ている。それならば、韓国からの直行便を入れれば、韓国人も増えてくると思うのです。

それでこの話ですが、先にバックパッカーを呼べばいいと思うのです。バックパッカーを呼ぶためには、バックパッカーは時間があるので、温泉だけではなくて、いろいろなアドベンチャーに力を入れてほしいのです。温泉はどこでも楽しめますが、自然が他のところでは見られない。少し調べたのですが、今はアドベンチャーの会社が二つあって、カヌーなどが体験できるのです。僕が面白かったのは、トロッコに乗ったらハンギングブリッジがいろいろ見られたことです。人間のためのものとサルのためのものもあって、これは面白いと思った。トレッキングのルートができて、黒部川をハンギングブリッジで渡れれば楽しいと思ったのです。しかし、宇奈月温泉の駅に着いて観光案内を見てもあまり情報がなくて、欅平に少しだけありましたが、それはそこまでアドベンチャーではないと僕は思いました。それで、「トレッキングルートを教えてください」と言ったら、「タワーの整備をするためにできているハンギングブリッジがあるけれども、それは関西電力のみ」と言われて、それは残念だと思ったのです。１時間、３時間、６時間のトレッキングが黒部川でできれば面白いと思ったのですが、それがまだできないのです。

それから、今騒がれている看板のことですが、やはりピクトグラムはいいアイデアだと思います。そうでないと、中国語、英語、韓国語を入れるのは大変な作業だと思うので、そこは力を入れてほしいです。今のルートは面倒だし、ロープウェイに乗るのにどこに並べばいいか、どうして左に並ぶのか分からない。どこにも書いていないし、日本人も多分分からないと思うのです。Ａ、Ｂ、Ｃと床に書いてありますが、それがどんな意味か分からない。それから、自然公園にごみを捨てるといけないのでビニール袋があったのですが、全部日本語で書いてあるから、外国人には分からない。自然公園は大切なところで、日本人はすごく環境に気を付けている。環境を守りたいという気持ちを持っている。それは日本のＰＲにもなるので伝えたいのです。でも、日本語でしか書いていないので、袋が置いてあることの意味を、多分、外国人は理解できないと思います。

最後に、宇奈月温泉の雰囲気づくりはいいと思います。ウェブサイトも考えていたよりはだいぶ進んでいました。例えば、アルペンルート・ドットコムが英語でできているとか、いろいろな旅館のウェブサイトも全部が英語でできている。完璧ではないけれども、他のところでは英語が全くないからまだいいです。でも、ルートがたくさんあって複雑ですから、僕が思ったのは、グラフィック、絵が出ているのですが、視点がいろいろあるのです。黒部ダムや、名前を全部覚えていないですがトンネルの入り口と出口、室堂など、いろいろなところにピックして、そこに例えば時刻表が出ていて、そこで散歩など、どんなアクティビティができるか全部をまとめてグラフィックでピックすれば、ここだったら例えば立山まで２時間かかりますとか、トレッキングできますとグラフィックで全部まとめて案内して、時刻表も出ていれば、いろいろなことが便利かと思います。

大体そんなところです。先ほど森トラストの伊達さんが話されたような設備のいいホテルに

外国人を呼ぶまでには、まだ何十年もかかると思います。そこまでまだ富山は遠いです。私は２日で行ったのですが、旅行としてとても高い。新幹線に乗って、いろいろなことを全部やると割と高くなる。これは僕だけの意見ではなくて、そこにいた他のもっと若い外国人に意見を聞いたら、立山に登ると高いと言われたのです。ですから、そこを何か考えていただければ幸いと思います。よろしくお願いします。

【西村座長】

外国人客をたくさん受け入れていらっしゃる山田拓委員、どうですか。

【山田（拓）委員】

まず、欧米豪マーケットに関してですが、ちょうど１週間前にオーストラリアに行っていまして、Japan Adventure Travel MartというＪＮＴＯのイベントに出て、そこでＪＮＴＯの招聘したプレゼンターが立山についてお話しされていました。富山県からも観光ではなくて空港の利用促進の方がいらしていましたけれども、当然、高いということはあるかもしれません。しかし、高いのはあまり関係なくて、今、富山県はオーストラリアでは結構モテ期で、今は攻め時だと思います。プレゼンターの方も立山はいいよと。

それで、見せていたのがみくりが池の写真などだったので、ブランディングという意味では多分、今までの台湾に向けた雪の壁ではなくて、欧米豪マーケットに行くときは自然の方で攻めるとか。訴求ポイントは絶対に変わってくると思うのですが、きちんと必要なものをそろえて必要な情報を出していけば、本当にいけるのではないか。皆さん結構興味を持って聞かれていまして、プレゼンターと富山県庁の方をおつなぎしたら、結構いろいろな人から問い合わせが来ていたりもしますので、当然、越えなければいけないことはいくつもあるとは思いますけれども、僕は個人的には全然、30年もかからないと思います。

受け入れ態勢の整備については、僕は何か足りないものはないかと思って事前に資料を見ていたのですが、ここではなくて、一つもしかしてこれをやればいいと思うのは富山駅です。今は富山駅のインフォセンターの再整備というお話があるので、そこで、富山駅は立山のゲートということを見せていくことができれば、ＦＩＴ、個人の方々は地鉄に乗っているのは大変だったりすると思うので、富山駅をゲートとして立山の玄関口はここですというところを作るというのが、動線を確保するとかすごくユニークというところではあってもいいのではないかと思いました。

あとは全体的な話で、先ほどから皆さん、他の委員の方もご指摘されていることで僕も思うのは、富山県全体の観光ビジョンの一部という位置付けだと思いますので、そこの整合性をきちんと取った形で、この会議の目的をもう少し明確にすることが必要かと思いました。最近、僕がいろいろな地域に関わっていて思うのは、人口といいますか、定住人口全体だと他のいろいろな要因が関わってくるので分かりにくいと思うのですが、産業従事者の人口をＫＰＩの一つとして見て、産業がちゃんと大きくなっていて、これが経済をつくっていますというところに今の28項目、もしくはこの取り組み全体がどう寄与していくかということを、今すぐ金額や雇用で何人採ることを目指しますというのは難しいかもしれませんが、この検討を進めていく上で、そういうＫＰＩを持って、これだけ産業内の雇用数を増やすために、ホテルなのかもしくは体験型プログラムなのかというような形の積み上げで、そこを目指していきましょうとい

う議論があるべきではないかと思いました。
今のここの部分からちょっとそれますが、もう発言の機会がないと思うので、言わせていただきました。以上です。

【佐伯（千）委員】
どうしても地元なもので発言が多くなって申し訳ないのですが、ユニバーサルデザインということで、称名滝へのアクセスの整備はぜひお願いしたいのです。称名滝は日本一の滝です。われわれはネパールと姉妹提携していまして、ネパールの方、エベレスト街道のクムジュンと組んで、ナムチェバザールの方々がよく来られます。彼らを連れていくと、ネパールにこんなものはない、素晴らしいと。特に音が、その爆音がすごい、素晴らしいと。このことに関しては、私より立山町長さんの方が随分と熱心で詳しいので、その辺をお願いしたいと思っているところですけれども。
ここも、やはり地元の人がやっていまして、われわれも古くからよく知っているところです。登山道がそこを走っているのです。八郎坂という随分昔からの古い名前の登山道が走っていまして、欧米の方は特にそういうのが好きだと思いますので、その辺を通れるようにしてあげたい。実は今、そこは不通になっているのです。すごく落石があって通行止めになってしまっていまして、工事は８月の上旬ぐらいまでかかるということなのです。アルペンルートは４月15日に開通しているのに、そのすぐそばにあって、しかも日本一だという場所が何で８月上旬まで開通しないのだろうと。非常にわれわれは不満というか、お願いするしかないのですけれども、ぜひともお願いします。

【西村座長】
登山道に関しては次のところでテーマになっていますので、そこでまた言っていただければと思います。
それでは、「21登山道の整備」から、今、話題になったところになりますけれども、ここから最後まで説明を事務局からお願いします。

（事務局より資料５に基づき説明）

【西村座長】
環境保全に関するところをいろいろ説明していただきました。環境面のプロジェクトに関しては、地元で江崎委員もやっていらっしゃるわけですけれども、外から見て何かコメントがあればと思います。

【江崎委員】
今、環境保全については考えていなかったところですが、正直、普段、何かを商品化したり、お客さまを入れていくということは、そこだけの高付加価値がかかるということがあるので、それを前提として考えてプログラムやシステムを作ったりしていかなければいけないのは当然のことですけれども、やっていて一番大事なのは、変化に早期に即対応できるシステムやコミュニティがきちんと連結されていることだと思っているのです。１回決めたからこれでいいと

進んでしまうことが結構多くて、真面目だとそういうことがあると思うのです。

他にもいろいろあるのですけれども、私が富山県の方々にお会いして一番思うのは、本当に真面目な方々で、すごく堅いのです。だからある意味、１回決めたことはすごくしっかり守られるのですが、いろいろなことをやっていて１回決めたらもうそれがルールになるので、絶対に守る代わりに、違うことに柔軟に変化するのがすごく難しいところがある。こういう自然のことや、自然だけではなくて何か変化が起きたときに、前はそうだったけれどももう違うと変えていけるような部分、システムがあった方がいいとすごく思うのです。皆さんもそういうことに慣れていくことが必要ではないかと、これは全体を通しても言えると思います。

一番心配するのは、せっかくこれだけお金をかけて、これから正直、平成30年からの少し時間も必要でやっていく中で、やったことが「１＋１＝２」になるのは当たり前のことなので、そこから３や４になったりするためには、地元の人たちが乗ろうと思わないといけないと思うのです。保護に関しても売ることに関してもそうなのですが、乗ろうと思わせるような仕掛けがもう少しあってもいいのではないかと思ったのです。

そうすると、例えば、先ほどの話でもいろいろあるのですが、今ここで作ったものを、元の戦略、戦術っぽいことが多いけれども、そういうことを地元の宿泊施設さんや地元でプログラムをやっている方々に落とし込みをしていけるようなことが必要だと。これを全部見て思ったのは、やはり「ブランド」と書いてあるので、長官や伊達さんも言われていましたが、ブランドと言う限りは、ブランドステートメントが欲しいのです。ブランドステートメントになりそうなものが見当たらなくて、何となく考えは分かるのですが、本物とかも出てくるのですが、どこでも「本物」などという言葉は使っているし、ここ富山、立山黒部でないと言えないブランドステートメント、お客さまと一体何を約束するのかというところを出していく。そこに環境保全も必ずリンクしてくると思うので、やはり大筋のところ、細かい事業や取り組みはそれぞれやっていくしかないと思うけれども、大きな、みんなが合意できるところ、地元もそうだしお客さまに対しても、そこをつなぎ合わせる、お客さまと地元の接点になるようなブランドステートメントというのはやはり考えるべきと思いました。

【西村座長】

せっかくいろいろな方々が集まっているので、こういうところで「そうだね」と言ってもらえるようなものが事務局の案として出てくると、皆さんに関わっていただけるのではないかと思います。

伊達委員お願いいたします。

【伊達委員】

私は割と都市の開発をしているわけですが、いつも思うのは、都市も経営しなければいけないという感覚です。ここの場合、都市というのは自然を経営することではないかと思うのです。そのために必要な投資をされるわけですが、その結果どういう経済波及効果を求めているのか、もしくはここの地域経済としてどのくらいの規模が必要なのか、その辺のバランスも必要ではないかと思うのです。

今、人がどんどん増えていけばいいと言いつつも、ではどのくらいを目指しているのか、どこが、誰がターゲットなのかというのがまず最初の疑問としてあって、次に、先ほどの世界ブ

ランドと名付けるブランドをどう捉えているのかと思ったのです。人数を増やして、とにかく来てくれればいいということなのか。そうではなくて、人数が来れば来ただけのいろいろなコストがかかる中で、もう少し質の高い人に来てほしいということなのか。もしくはトータルで、資源を活かしたらどういうターゲットが狙えそうなのか。その中で選択しつつ、面が広がれば広がるほど本当はコストがかかりリスクも広がるので、場合によっては範囲を狭めることも戦略なのです。そういうことも含めて、全てはできないかもしれないということをどこかで考えていただいた方がいいのではないかと思います。

もちろん、いろいろなアイデアを出すときには、できる限り幅広に、あらゆることを考えるべきだと思うのですが、その次に、選択する勇気、選択しない勇気や絞る勇気も持ってやるから経営というのはできることだと思うので、そういう意味で地域経済とも少し向き合いながら、戦略を練られたらいいのではないかと思います。

【西村座長】

選択と集中ですね。それとターゲットという点に関しては、また次の議論のときの資料で、いろいろ加えていただきたいと思います。

【森田委員】

私は今年、立山にもう十数回行っているのですが、いろいろありますけれども素晴らしいところだと思っていて、特に立山の最大の魅力だと思っているのが世界有数の豪雪であるということなのです。豪雪は雪の壁だけではなくて、そこに氷河期からの生き残りであるライチョウがいたり、そこの雪原が１年で解け、そしてまた新しい雪原が現れるという四季の繰り返し、非常にダイナミックな自然がある、魅力的なところなのです。そこで現状、今までお話が出てきましたけれども、非常に個別の話は出てきていますけれども、ざっくり言って、皆さんが楽しむアクティビティ、多くの人が来られるものがあってこそのホテルや整備だと思うのです。その辺ができやすいところがないと困るということ、チームの関わりということで言えば、豪雪であるということは当然リスクもあるわけで、そのリスクについても、山のことを私たちが知らなくていいわけはないですし、火山のこともライチョウのことも、雪崩のリスクについても、多くの人が情報共有して取り組んでいく必要があると思うのです。

ですから、個別のこと、ボランティアはボランティアに任せておけばいいという話では当然なくて、事業者が関わっていく中で、その事業者はどのように知識を付けていくか。事業者は事業者で、ガイド活動等をする山岳ガイドもいらっしゃいますし、マネジャーガイドもいるし、ボランティアのガイドもいる。多様なガイドがいる中で、それぞれの役割分担もあるのですが、情報を知っていないと多くの魅力を伝えられないと思うのです。ですので、やはり地元の人もそうですし、地元でなくてもいいのですけれども、ガイドをやる方やアクティビティをやる方、トレッキングガイドをする方が、もう少しばらばらな話ではなくて、ワーキンググループをやられると思うのですけれども、個別の話をして終わりにならないようにしてほしいと思うのです。

特にやはり、今、私が自分で行っていて思うのは、火山のこと、雪崩のこと、変わりゆく天気など、もっといろいろなことを知っていないとできないと思うことがあるのです。一方で、では誰もそれをやらなくていいのかというと、ガイド活動をしている人には非常に少ないので

す。私が知っている限りそんなにいないです。でも、それでは全然必要な情報を提供できないことになるので、総合的に、自然を活かしながら自然の知識も得ながら、お客さんに楽しんでいただくこと、リスクも含めてお客さまに伝えていくことがこれからはすごく重要なのではないかと思うのです。ですから、ばらばらでは仕方がないと思うわけです。

【西村座長】

それを支えているパーツということでしょうけれども、それが何を指すかということですね。

【森田委員】

そうです。まとめ、方向性として私はそう思うのです。

【オブザーバー】

この資料で言うと６番と22番、12番もそうかもしれないですが、「ガイド」という言葉が出てきているのです。ワーキングで検討とそれぞれに書いてあるのですが、一方は立山黒部貫光さんを中心にワーキングを開催する、22番は県さんがやられると書いてあって、ガイドはすごく大事だと思うので、しっかりとこの地域で素晴らしいガイドがもっとたくさん出てくるようにということでは素晴らしいことだと思うのですが、主体がばらばらになって、違う方向を向いてそれぞれできるというのはすごく残念なので、総合的にきちんとマネジメントして、こういうところも楽しむことができる環境にもきちんと配慮できるような形でぜひ検討を進めていただければと思います。

【西村座長】

いろいろなプロジェクトごとに縦割りになっているので、もう少しそこをつなげられるよう調整してほしいということですね。ワーキンググループが28もできたら大変なので、もう少し工夫できればと思います。

【岡本オブザーバー】

いろいろ議論を伺っていて思いましたのが、何が魅力で、何を守らなければいけないのか、そのものがお客さんに訴えかけるものですので、そういう柱、軸というものをきちんと見据えておく必要があるのかと。先ほどライチョウの話が出ましたが、この地域には歴史的なものがすごくあると思っています。江戸時代からライチョウは加賀藩ですごく厳しく守られてきていたわけですし、先ほど山小屋の佐伯さんがおっしゃっていましたが、地域のガイドの方々が江戸時代からずっと守ってこられて、山を支えてこられた方々が山小屋をやっていらっしゃるという歴史があります。

それから、今日はＴＫＫの佐伯社長さんがいらっしゃっていますが、30年ほど前にも佐伯社長さんがおっしゃっていたのですが、神様の山に穴を開けてトンネルを掘ったのだから、そこは本当に、ＴＫＫとしてはそういう地域だということを念頭に置いてお客さまに来ていただいていると。時代は変わりましたが、当時はだからこそ客室にテレビは絶対に置かないということをおっしゃっていました。時代が変わったので、今は少し違ってそうされていないと思うのですが、そういう意識をずっと持ってこられて、山を神と思い、ライチョウは神の鳥というこ

とで守ってこられた皆さん、地元の方々が会社をされている。

もう一つが、諸外国とヨーロッパと違って、今日もお話がありましたが、世界中で最も豪雪地帯で、なおかつ生物多様性が非常に高いところでございます。先日、大臣にお会いしたときに大臣も言われていたのですが、本当にいい場所だけに、非常に気を付けなければいけないところがある。そこが他の地域と違って非常に脆弱なところでもありますので、富山県さんはものすごく、この数十年間、アルペンルートを開発した後に、もう50年以上、植生復元も続けてきて、いまだに試行錯誤されていらっしゃいますし、ライチョウ保護にもものすごく熱心に取り組んでいらっしゃるので、日本中でここが最も安定している、これは県として非常に誇れるところだと。そういう歴史も含めて、海外の方々にストーリーとして説明していくということが、一つブランドとしてはあるのかなと今日のお話を伺っていて思いました。単に大自然があるというだけではなくて、日本の場合はそういった一つ一つが、神様であったり、それで何を守ってきて、どう利用してきて、どう人が変わってきたか。そういう点では、私たちはよそ者として、今日はいろいろな有識者の方々がこうしたらいいという視点を出されましたが、それも非常に大事ですし、地元の方々の今まで培ってきた知恵、体験されてきた気象条件など、いろいろなものもきちんとくみ上げて物事を考えていくということが大事かと思いますし、またそこが世界に打って出られる魅力かとも思いました。

そういう点でいろいろと、これは１年間でよくこれだけまとめられたと思っているのですが、これからは情報を少し分析していくということも、先ほどどういう時期が閑散時期で、お客さんが泊まっている少ない曜日、時期にどうやって取り込んでいくのかというのもデータとしてあまりない中で議論されていますので、そういうところも含めて議論されると、より実のある次の段階に行けるのかなという気がいたしました。以上でございます。

【舟橋オブザーバー】

伊達さんの話も含めまして、立山黒部アルペンルートの魅力は二つあります。一つは黒部ダム、二つ目は今ほどお話があった立山トンネルです。一つのダムを造るのに171名が亡くなっているというのは、日本全国を探してもありません。また、国家プロジェクトではなく、佐伯宗義さんをはじめとする大勢の方々が、あの高地で立山にトンネルを造った、厳しい大自然の中でこれだけのハード整備をしたところは、日本には他にないと思っています。

では、これから何を目指すのか。立山黒部アルペンルートへ立山黒部貫光さんはこれまで団体旅行客をどんどん入れていた。しかし、これからは個人客だと。星野リゾートさんがおっしゃっていましたけれども、とにかく欧米人を入れた方がいい、それにここは弱かった。そのとおりだと思いまして、欧米の方々が立山黒部アルペンルートを歩いているのを見たいです。バックパッカーというのはまさしくそのとおりですが、最近苦情が多いのは、立山駅周辺にＡＴＭがないため、個人旅行客が本当に困っていると聞いています。そういうことも含めて整備していきたい。欧米の方々が大勢来られれば、自然と東南アジア系の方々も来てくれるのではないかと思います。

【西村座長】

ありがとうございます。モンテベルデ委員、全体的に今日の議論を聞かれて、印象も含めて発言を。

【モンテベルデ委員】

先ほどの岡本さんともう１人の方の二つの意見を聞いて、やはり欧米人にこの素晴らしい歴史を伝えなければいけないと思います。それは、僕も行く前に学ぶ機会がなかったのです。だから、それを富山に行く前に、黒部ダムの百七十何人も死んだとか、どのくらい時間がかかったとか、全部の歴史物語をつくってくれれば、本当に欧米人がそれを尊敬し見方が変わってくるので、ぜひそれをつないでほしいのです。そういうふうに紹介してほしいです。

その後で、世界ブランド化で僕が思うのは、スローガン、ステートメントを考えて決めるということです。皆さんで整理して、10年間ぐらいの方向性をスローガン、ステートメントとして決める。

最後に、初めてこの会議に参加して、びっくりしたのが割と真面目にいろいろな議論をして、ワーキンググループをつくってということでした。本当にここまで、28ものプロジェクトをまとめて、結構力を入れて、また28をまとめてグループでもう少しやったら、これだけ大きな会議でみんなで議論して、資料もたっぷり、いろいろな仕事をしてきて、本当にみんな真面目でびっくりしました。これは成功すると思います。こんなふうに力を合わせていいものになる。これからよろしくお願いします。

【西村座長】

ありがとうございます。どうぞ、久和委員。

【久和委員】

電力会社の立場から発言させていただきたいのですが、先ほど、関電ルートの話がありまして、私も電力会社ですので、設備を維持管理するという立場で関西電力さんのおっしゃることもよく分かるのですが、一方で、県民の立場からすれば、観光として非常に魅力的なルートでもありますので、開放されたらいいなという希望は強く持っているところです。いろいろ課題はあると思いますけれども、県さんと関西電力さんとで、胸襟を開いていろいろな問題についてフランクにぜひ話をしていただきたいと感じました。

それから、次は私どもの話なのですけれども、ホテルを新築あるいは増築する、あるいは光ケーブル、商用電源をつくったらどうかというお話もあるのですけれども、電力供給が非常に難しいというか、非常に高山の上ですので、現在、電力は大町側から中部電力さん、それから関西電力さんを通して、私どもがホテル、山小屋に電気を売っているという、非常に厳しい状況のところです。ただ、設備の更新時期が来ておりまして、何らかの対策をしていかなければいかない時期に来ていますので、どの辺でどのくらいの電力需要が想定されるのかということをきちんと整理していただければ、私どもでまたそれに対する供給方法ができるのかワーキングの方で検討させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

【西村座長】

ありがとうございます。そろそろ時間ですけれどもいいですか。

【山田（桂）委員】

どうしても議事に残る話なので、少しだけ手短に。今日の宿泊のところで若干、違和感があったのは、レベルが高い、低いという議論になっていましたが、レベルというのは、特に立山山荘協同組合の佐伯さんに失礼かと。山小屋としてはレベルは高いのです。伊達委員のお話は、カテゴリーがもっと豊富でないと駄目だという話で、発言されるときにレベルとカテゴリーは一緒にしないようにしていただければと思います。

私も昔、山岳雑誌の関係で、立山の山小屋にはいくつか、少し昔ですが行きました。その当時からヨーロッパの山小屋を見ていますが、レベルとしては決して低くないです。カテゴリーとしては、やはり五つ星から一つ星、もしくは山小屋も含めていろいろな多様性が、今後は特に個人客ということですから、市場にコミットするために必要という部分がある。レベルとカテゴリーという言葉がぐちゃぐちゃになっていましたので。

そういう意味では、クオリティという部分では、先ほど真面目という意見もありましたが、富山県の場合は観光だけではなくて、例えば、山小屋だけではなくて黒部峡谷鉄道さんも立山黒部貫光さんもそうですけれども、いろいろな運営面でも世界的に見ていればはっきり言いましてレベルは高いです。これは間違いないと思います。ただ、もちろん製造業、製薬も含めて、富山は非常に真面目でレベルが高いのですけれども、今日たまたまブランドステートという話が出たときに、江崎委員もしくはオブザーバーの岡本課長の話はまさしく大事なところで、ただ、ブランディングしていくときにベースはまさにクオリティの話なので、クオリティをどう要は磨き上げていくのか、レベルアップするのか、もっと守るべきものは徹底的に守らなければいけないし、利活用できるものは徹底的に利活用しなければいけない。その進歩、進化をどうするのかというところで、私はやはり地元の方の考え方、これまで培ってこられた哲学、思想、美学というのを基本に置いていただければ間違いないと思います。以上です。

【西村座長】

よろしいでしょうか。では、伊達委員から最後のコメントをいただくことにしましょう。

【伊達委員】

結局、今のマーケティングは当然ストーリーの話で、神様の山であるとか、そういうこともすてきなことだと思いますし、ダムができたプロセスというのは日本人であればみんなが知っていることだと思うのです。そうやって本当に守りたいというもの、もしくはこうやって立山黒部を良くしたいというときに、ちょっと各論になり過ぎていて、総論賛成の本当にみんなが目指したいものをまず明確にしてあげる必要があるのではないか。それがイコール、本来はブランドになるはずだと思うので、そういう作業をするというか、そういうものも大切にしていかないと、各論に行き過ぎて、細かい話はああだこうだ、イエス・ノーだという話になっているのが気になったので、せっかくいい資源があるのでうまく活かされたらいいのではないかと思います。

レベルと言ったかどうかは分かりませんけれども、当然、多様性の中でお客さまがいて、いろいろなニーズにどんな施設で応えていくか、ソフトで応えていくかというところにもいろいろな選択が当然ある中で、その担い手になりたい人がいることがまず重要だと思いますし、地域の中に根ざしていくことが必要だという中で、でも、それが中の人にしろ外の人にしろ、共有できる総論賛成のテーマというのをきちんと持たれていく方が、今後も建設的な議論になる

のではないかと思います。

【西村座長】

ありがとうございます。次からの資料では、その頭のところを考慮していただいて、そこは共有できると思えば一つ一つの違いも乗り越えられると思うので、ぜひそういうことをしていただきたい。よろしいですか。

それでは、少し時間が延びてしまって申し訳ないのですけれども、石井知事から一言いただければと思います。

【石井知事】

今日は本当に貴重な、また多岐にわたるご意見をありがとうございました。何人かの方から、また、今、座長からもお話がありましたけれども、総論といいますか、「世界ブランド化」という以上はブランドステートメントをもっとしっかりしたものにすべきというのは全くおっしゃるとおりで、それらしいものは作っていたのですけれども、説明の仕方の問題もあり、またもう少し今日出たお話も踏まえてしっかりしたものにして、なるほどそうだなと大方の方にご理解いただけるものにしていきたいと思います。

神の山という話がありましたけれども、立山はまさに1,300年前に大伴家持が平城京から国司として来て５年間いて、「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」と、本当に神の山だと1,300年前に歌って、そういう気持ちがいつの時代にも続いて、立山信仰もありますから、自然が豊かで美しいというだけではなくて、同時に非常に厳しい自然で、ですから、今、百数十人も亡くなったという話がありましたが、立山をいろいろな形で国民・県民のために有効活用するためにも、たくさんの人が命を亡くして、立山砂防もそうですよね、そういう歴史のある山ですから、そうした自然や歴史・文化といったものを大事にする。同時に、ライチョウ保護ももちろんされておりますけれども、日本で初めて自然の植生を守るという観点から、３年前に自動車排ガス規制を県でいろいろ作ってやっているとか、非常に真面目という話がありましたが、自然環境保全については真面目に取り組んでおりますし、これからもそれは大事にしたい。また、布橋灌頂会、今日はあまり話題に出ませんでしたが、これもユネスコの文化遺産に４～５年前に認定されておりますし、そういう文化的なものもたくさんある山ですから、そういったところをしっかり守りながら、アジアの方だけではなくて欧米人にもしっかりアピールできるようにしていきたいということで、お話のように進めていきたいと思います。

それから、いろいろなお立場のご意見が出ましたけれども、立山黒部は数千年、人類が出てきてからのいろいろな歴史がある、日本で唯一の氷河がある山でもありますし、いろいろな地元の方が熱意を持って関わっておられるのはもちろんですが、同時に日本が世界に誇る国民全体の財産だと思うのです。特定の企業のためということではなくて。そういう問題意識に立って、それから、今の日本は少子高齢化が極まって人口減少が本格的に始まっている、そういう国でしっかり新たな未来を切り開くために、いろいろな政策の中で観光立国ということも今は目指そうとしている、そういう文脈の中で、この立山黒部の世界ブランド化をしっかり進めていきたいと思っております。

お話のように28項目、かなりきめの細かい話も含めて動いています。事務局が随分苦労してまとめてくれたのですが、ご指摘の点は全くごもっともな点が多々ありますので、総論なりブ

ランドステートメントと連携させながら、こういう各論をうまく体系化して、また縦割りではなくて横軸を通していかないと、同じガイドなのにばらばらでは困るという話がありましたが、全くそうだと思いますので、そういう点にも留意しながら、またたたき台も示させていただきますので、よろしくお願いしたいと思います。

また後で座長からお話があると思いますが、これからワーキンググループについても、既に皆さまにもご相談しながら構成メンバーも決まっておりますので、本当にお忙しい方々ばかりですけれども、ぜひご参加いただいて、中身のある「なるほど今回のレポートはすごい」と、また書いただけではなくて、しっかり実行していく、またできればスピード感を持って進めていく。そういうことに富山県としてはもちろん、私を含めて全力を挙げますので、また皆さまもそれぞれのお立場でご理解、ご協力をよろしくお願いしたいと思います。以上です。

【西村座長】

ありがとうございます。それでは意見交換はここまでにさせていただきたいと思います。

（２）その他

【西村座長】

次の会議は、配られた紙にもありましたけれども、10月開催と出ております。また、７月にはワーキンググループをお手元に配られたメンバーの体制でいきたいということですので、この辺もお願いしたいと思います。また、先ほどからの議論にありましたように、ワーキンググループの中の話題としては、紙にはなかったですけれども、宿泊施設の問題、また、黒部ルートに関しては関西電力さんからかなり細かいデータも出していただいて、それを基に議論をしたいということですので、どうかいろいろな形でご協力をお願いしたいと思います。

また、ワーキングの中身をフィードバックして進めていきたいと思います。第２回会議で、ワーキンググループの進捗状況を報告していただきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは、進行を事務局にお返ししたいと思います。

以上